

兵庫県見長大歳神社古墳の石室測量調査報告

奈良大学文学部考古学研究室

はじめに

第1章 地理的環境と周辺の遺跡

第2章 横穴式石室の概要

1. 墳丘と石室の現状

2. 横穴式石室の概要

(1) 羨道部

(2) 玄室

第3章 調査成果のまとめ

1. 見長大歳神社古墳の石材利用の方法

(1) 石材表の分類による石材構成

(2) 石材平面率の分類

(3) 小結

2. 石室の年代について

おわりに

(図版)

はじめに

本書は、兵庫県水上郡柏原町に所在する、見長大歳神社古墳の石室測量調査の報告書である。奈良大学文学部文化財学科では、考古学実習の一環として随時、野外実習を実施している。1993年度には、兵庫県水上郡青垣町に所在するボラ山1号墓の発掘調査を実施し、以降継続して調査を行ってきた。また、考古学研究室では、水上郡教育委員会の依頼により、同郡内の遺跡分布調査を1990年度以降継続して実施してきた。当地域の遺跡の分布を明らかにする一方で、当地域の歴史を復原する目的で取りかかった。調査の過程において、比較的良好に遺存し、資料的価値の存在する遺構を数多く確認した。当墳もその一つであり、測量調査と資料の公開を痛感した。そうした経過において、本年度は、水上郡教育委員会の協力を得て、同古墳の石室実測調査を実施することにし、考古学実習の野外活動として実施することになった。従って、本書は考古学実習の成果報告を兼ねる。

測量調査は、1995年11月1日より6日まで行い、補足調査は12月23日より28日にかけて行った。調査に取り掛かる前は、調査方法や石室の基本的な理解と問題点等の検討会を重ね、機材の準備を整え、実際の調査を開始した。本報告に関わる整理作業は、調査の終了から引き続き行った。本書で使用した方位は磁北を示し、標高は東京湾平均海面を基準にした。

本書は、水野正好、酒井龍一、泉拓良の指導の下、植野浩三、吉田和彦が編集を行った。執筆は植野・吉田に加えて、調査参加者が分担して行い、部分的に植野・吉田が訂正・加筆したところもある。執筆分担は文末に記している。石室図面の製図は、牛谷好伸・渡邊淳子

が担当し、石室の写真は植野が撮影した。調査参加者は以下の通りである。(植野浩三)

調査指導 水野正好(奈良大学学長)、酒井龍一・泉拓良(奈良大学文学部教授)

調査担当 植野浩三(奈良大学文学部助手)

調査参加者 吉田和彦(調査班長 奈良大学大学院文学研究科1年次生)、牛谷好伸、
江野道和、大庭孝夫、柏木大延、北林雅康、瀬戸哲也、長本幹、渡邊淳子
(以上奈良大学文学部文化財学科2回生)

調査協力者 辻勝、徳原多喜雄、山田義三、下山文隆(以上氷上郡教育委員会)、柏原
町見長地区自治会、柏原町丹波悠遊の森

第1章 地理的環境と周辺の遺跡

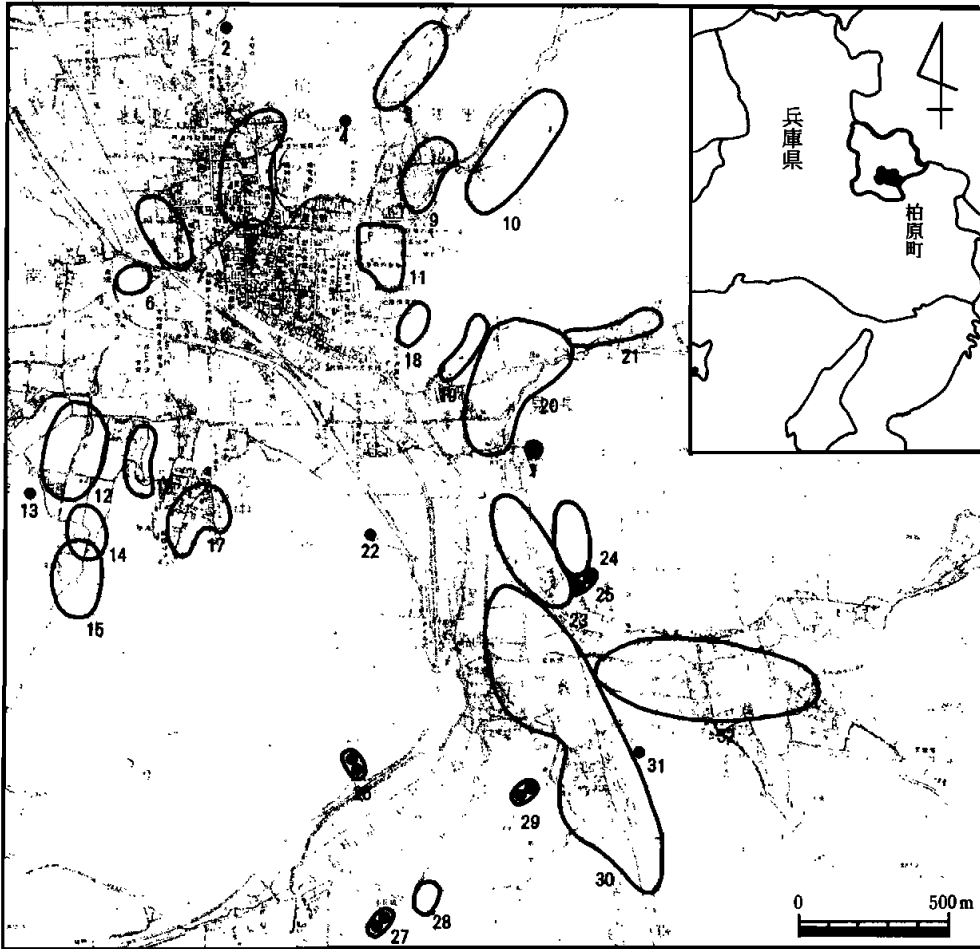
見長大歳神社古墳は、兵庫県氷上郡柏原町見長字森ノ下に所在する。現在では1基のみが単独で存在しており、本来、群を構成していたか否かは不明である。

氷上郡は兵庫県東北部に位置し、郡の北部では京都府と境界を接している。氷上郡一帯は丹波高地に属しており、氷上盆地は非常に低平な埋積谷の様相を呈している。氷上町石生付近は標高95mであるが、本州中で最も低い中央分水界であり、古来から「水分かれ」と呼ばれている。この「水分かれ」を通過することによって、苦勞なく瀬戸内海と日本海を結ぶことが可能であり、昔より絶好の交通路であったことが推測できる。近世までは氷上郡は、山陰道の丹波国に属していたが、明治時代になって多紀郡とともに兵庫県に編入された。このことは、郡内を山陰道が縦断するといえども、文化的には郡北部を水源とし、古来より「水の川」と呼ばれて、氷上郡の名の由来ともなった加古川を媒介として、瀬戸内海側との交易や通交の影響が大きかったことが主な要因として考えられるのである。

この盆地の南部に所在する柏原町は、加古川の支流である柏原川が貫流し、町北部から多紀郡丹南町と接する南部の山岳地帯に行くにつれ、平地は狭まっている。この周囲には、いくつもの扇状地状の小谷が存在し、見長大歳神社古墳はこうした小谷の1つに存在する。

郡内の遺跡としては、旧石器～平安時代にかけての複合遺跡である七日市遺跡(春日町)や、新治廃寺と共通する伽藍配置をもつ三ツ塚廃寺跡、奈良時代の「里長」に関連する遺跡と推定される山垣遺跡などが著名である。郡内においては、約700基の古墳が確認されているが、仿製三角縁神獣鏡が出土した親王塚古墳(氷上町)、二間塚古墳(春日町)などの前・中期古墳も知られるものの、それ以外の前・中期古墳の明確な古墳は不明であり、そのほとんどが後期古墳といわれている。

柏原町においては、弥生時代後期の集落としての大新屋遺跡や、墳墓群である芋田遺跡が確認されている他は、よくわかっていない。古墳時代にはいると、前・中期の古墳は少なく、



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	見長大歳神社古墳	古墳	古墳	17	北中遺跡	散布地	古代～近世
2	昭和池南古墳	古墳	古墳	18	新町遺跡	散布地	古代～近世
3	藤の目古墳群	古墳・4基	古墳	19	新町古墳群	古墳・5基	古墳
4	柏原高校古墳	古墳	古墳	20	見長遺跡	集落	古墳～中世
5	柏原・本町遺跡	散布	古代	21	見長上古墳	古墳・2基	古墳
6	畑田遺跡	集落	古代～中世	22	今石古墳	古墳	古墳
7	本町遺跡	散布地	古代～中世	23	法蓮寺遺跡	散布地	古代～近世
8	石田大歳神社古墳	古墳	古墳	24	法蓮寺古墳群	古墳・16基	古墳
9	東遺跡	散布地	古代～近世	25	円成寺古墳群	古墳・2基	古墳
10	東奥古墳群	古墳・6基	古墳	26	下小倉古墳群	古墳・2基	古墳
11	柏原藩陣屋跡下層遺跡	居館・寺院址	古代～近世	27	赤花古墳群	古墳・2基	古墳
12	三原西遺跡	集落	古墳～古代	28	波尼遺跡	瓦窯	古代
13	室谷古墳	古墳	古墳	29	中山古墳群	古墳・2基	古墳
14	三原遺跡	集落	古墳～中世	30	下小倉遺跡跡	集落・散布地	古代～近世
15	三原古墳群	古墳・15基	古墳	31	上小倉古墳	古墳	古墳
16	北中古墳群	古墳・4基	古墳	32	上小倉遺跡群	集落	古代～近世

第1図 見長大歳神社古墳と周辺の遺跡

方格規矩鏡が出土したといわれる萱刈坂古墳が前期の可能性をもつ。後期古墳は、町北部を中心に120基あまりの古墳が分布調査によって確認されている。これらの多くは、丘陵上もしくは、小谷の奥まった位置に群集して構築されている。見長大歳神社古墳の周辺には、南方に法蓮寺古墳群、北方に深田古墳群、藤の目古墳群などの古墳群がある。このうち藤の目4号墳は、見長大歳神社古墳同様、羨道の長い巨大な横穴式石室を備えており、関連性が注目される。また、見長大歳神社古墳の西方には、近年、古墳時代後期の方形竪穴式住居跡等が確認された三原西遺跡があり、当古墳を含めた集落遺跡として関連が注目される。

古代には、山陰道に関連すると思われる掘立柱建物の遺構が検出された柏原陣屋下層遺跡があり、当地域が中継地として重要な場所にあったことがわかる。中世に入ると、高見城跡や金山城跡など多くの城館が築かれている。江戸時代には、中心地は柏原織田藩の城下町として発展していき、以降、当地域の政治・経済の中心地となっている。(大庭孝夫)

第2章 横穴式石室の概要

1. 墳丘と石室の現状

墳丘の現状 古墳は、見長の集落の一画に単独で立地する。見長の集落は、西方に向かって開ける扇状地に営まれている。古墳はその尾根と尾根に挟まれた谷部の奥部に所在し、南・北側は浅い谷が入り込む場所に立地している。

古墳の周囲には、北側から西側にかけて高さ約1m前後の石垣が道路に沿って築かれ、東側と南側も道路及び畑によって削平されている。また、墳頂部は大歳神社の祠が鎮座するため、その造営時に削平を受けたと見られ、墳頂部は平坦面になり、さらに墳丘の東側は、祠に通じる参拝道によって削平を受けている。わずかに墳丘の北西側の裾部は、約3mにわたって弧状になってつながっているため、この場所が墳丘の裾部を残している可能性がある。この箇所を墳丘裾部と仮定して、石室の平面形を参考に復原すると、径約20mの円墳と推定することができる。また、羨道入口部床面から、現状の墳頂の最高部までの高さは、約4mを測り、比較的高い古墳であったことがわかる。(瀬戸哲也)

石室の現状 石室は、全長10.60mを測る両袖式横穴式石室である。『兵庫県史』第1巻1974年刊には全長10.02mとあるが、新たな基底石を確認したため同上の数値になった。石室の遺存度は良好であり、開口部の一部が崩落している他は、ほぼ旧状を保っていると思われる。以下各箇所の規模を述べていくが、床面の多くは埋没した状態であり、特に玄室部がかなり埋もれており、また、発掘調査等も行われていないため、あくまでも現状における規模であることをことわっておきたい。

玄室の規模は、長さ3.86m、幅は奥壁側で1.90m、玄門側で2.10m、最大幅は2.14mを測る。平面プランは、奥壁側と玄門側の幅が若干異っており、均整な長方形プランをとらない。高さは、奥壁側で2.08m、玄門側で2.30m、玄室の中心付近で2.22mを測る。玄門の高さは中心線上で1.06mを測る。

玄室の左側壁は、大型の石を多用して5段積みで形成している。最下段は4石で構成されるが、そのうち1石は隙間を埋め合わせる石材とみられ、基本的には3石から形成されている。1～3段目まではほとんど迫り出しは認められない。4段目より上部は石材を前方に迫り出している。右側壁の迫り出し状況は、左側壁と同様である。全体的に雑な割石が使用されている。奥壁は3段、前壁は2段で構成される。楣石は、羨道部より下に0.30m下がる形で架構されている。玄室の天井部は3石で構成される。

羨道は直線的に延び、規模は、全長6.74m、幅は玄門側で1.42m、開口部側で1.66m、最大幅は1.74mを測り、玄門部側でやや狭くなっていることがわかる。高さは、玄門部で0.96m、開口部側で1.64m、最大高はほぼ中心部で1.76mを測る。

羨道部の左右の側壁は、3～6段積みであり、いずれも奥壁側から6枚目の天井石付近で石の積み方が大きく変化している。ここを境にして、開口部側が中型の石を多用しているのに対し、玄門部側は大型の石を使用している。この変化は天井部においても同じである。天井部は5石で構成されるが、ここを境にして玄門部側は平坦に2石続くのに対し、開口部側は1段上へ約0.2m上がった後、開口部に向かってやや下がる形で2石を配している。同部の天井石は、正面からみて目立つ位置にある。(牛谷好伸)

2. 横穴式石室の概要

(1)羨道部

羨道部左側壁 羨道部左側壁は、全体的には横長の石を多用して3～6段積みで構築しており、上部はもち送り状に迫り出す。石の積み方は、開口部から見て2番目と3番目の天井石に約0.2mの段差がある箇所できく分かれる。玄室側は3～4段積みで大型の石を横位にして積み、上部は石をやや斜めに積んでおり、その隙間には拳大～人頭大の石を詰めている。開口部から3段目の天井石の箇所は、特に大型の石を2段に積んで、天井石との隙間には人頭大の石を詰めている。

開口部側は6段積みで中型の石を用い、隙間には拳大より小さめの石を詰めている。開口部側は玄室側と比べ積み方が雑である。また1段目においても小型の石を用いており、玄室側とは大きく異なる。現状の開口先端部は、4段目までの石材が残存している。図面では点線で記しているが、開口先端部より約0.5m外側に小型の石が埋まった状態で存在しており、羨道がここまで続いていた可能性がある。(大庭孝夫)

羨道部右側壁 羨道部左側壁と同様に、天井石の段差が確認できる箇所での石の積み方が変わる。開口部側は、4～5段積みである。1段目は主に小型の石を使用している。高さが揃わず玄門に向かってやや右上がりに形成されている。その上部は、1.3×0.8mの扁平な石を使用している他は、中・小型の石で構成されている。天井石との間には、扁平な石を横位に置いて天井石を支えている。

玄門部側は、最下段は、玄門部から約3.50mの位置まで4個の石で構成し、上面をほぼ水平に揃えている。そして上方には、前述の段差をもつ箇所では1.3×0.4mの横長の石を置き、玄門側に1.0×0.8m、1.3×0.95mの大型の石を置き、その大型石の上方に、1.2×0.3mの横長の石を設置している。この他はおもに小型石材を使用している。隙間は人頭大以下の石で充填している。開口部側と比べると、石材の使用方法は大きく異なる。開口部側の方が比較的雑な積み方になり、対称的といえる。(江野道和)

(2)玄室

玄門石 玄門は、左右に立柱状に石を立てている。左袖部の方は、奥行きある安定感のよい石材が使用され、その上部に、玄室と羨道の石材の一部が載り、その上に楣石がくる。右袖部は左袖部に比べて、やや板石状の扁平な石を用い、奥行きがなく、平面図で見ると宙に浮いたような状態になる。

玄室前壁 玄室前壁面は2段で構成されており、0.60m×1.50m大の石の上に0.80m×1.50m大の石が配置され、特に大型の石を用いたつくりになっている。両石とも亀裂が多数見られる。1段目の石は、玄門立柱上に玄室左側壁2段目の石および小型の石等によって右側壁側との高さを調整した後、架構している。羨道部の天井石の高さより1段(0.30m)低くなっており、楣石の役割を果たしている。2段目は、左側壁の方は1段目上にそのまま載るが、右側壁の方は、玄室の3段目の石の上にも載るような形になっている。また図面を見ても分かるように、石の右上部には側壁の方から中央に向けて浅いL字状の切り込みがあり、そこに玄室右側壁5段目の石材がわずかに載るような形になっている。前壁と玄室左右側壁との隙間は、小型の石を使用して充填している。左側壁の方が隙間が多く見られ、その分多くの石を使用している。(渡邊淳子)

玄室左側壁 玄室左側壁の石の積み方は、奥壁側の下方にある高さ0.50m、幅1.10mの横長の石材、中央の方形の大型石材、玄門側の横長の石材の上に、菱形の中型石材を置く。さらに横長の石材の上に置かれ玄門立柱石と、楣石との間に横位に設置した石材までの高さがほぼ一致しているため、楣石架構前の段階での1つの作業単位であると考えられる。この単位にある奥壁側下方の横長の石材は、下に板状の扁平な石材を詰め込むことにより高さを調整しており、また、玄門側の横長の石材とその上に載っている菱形の中型石材の間は、拳大の石で隙間を埋めている。

この単位より上の石材は、奥壁側と中央は、凸状大型石材の凸部が天井石と接して、縦長の石材を配置して築造している。この点から、天井石の高さを決定した石材であると推測され、凸部から天井石の間は人頭大の方形の石材で隙間なく充填している。また、凸状大型石材を境として傾斜が異なり、やや持ち送り状に迫り出している。全体的に奥壁側では、安定感のある横長の大型石を用いて奥壁と対応させて整然と構築されているのに対し、前壁側は方形の小型石、あるいは拳大の石や縦長の石を用いて繁雑に構築している。現状では、石材間に詰め込んでいる石の崩落などで石と石との間が空いたり、天井石や構築石材の重みで亀裂の入っている石などが見られる。(北林雅康)

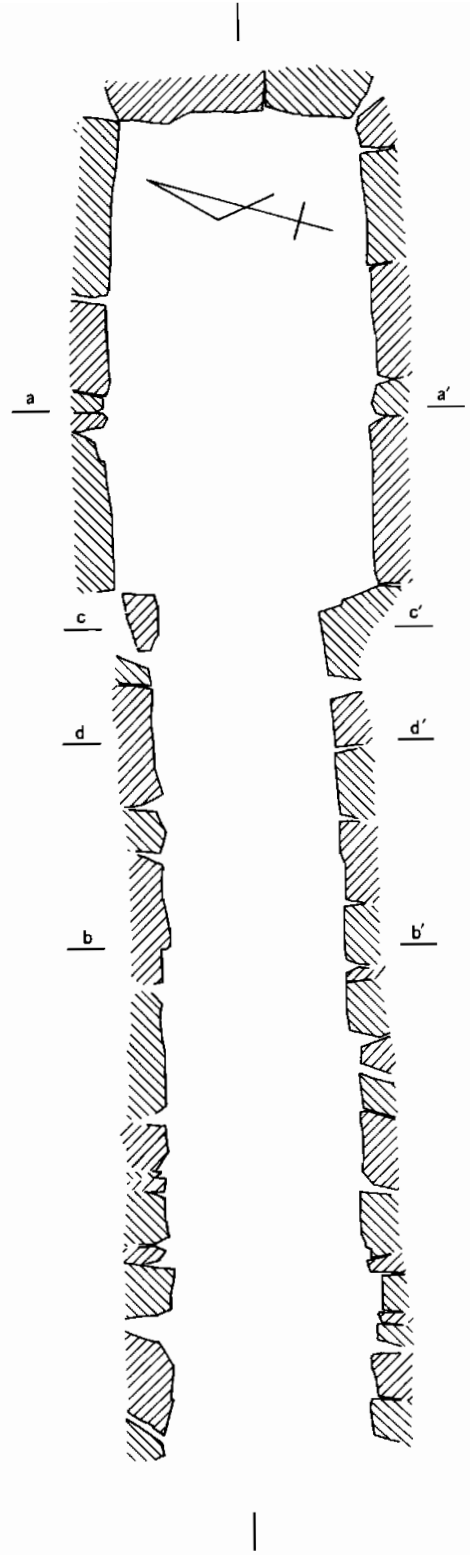
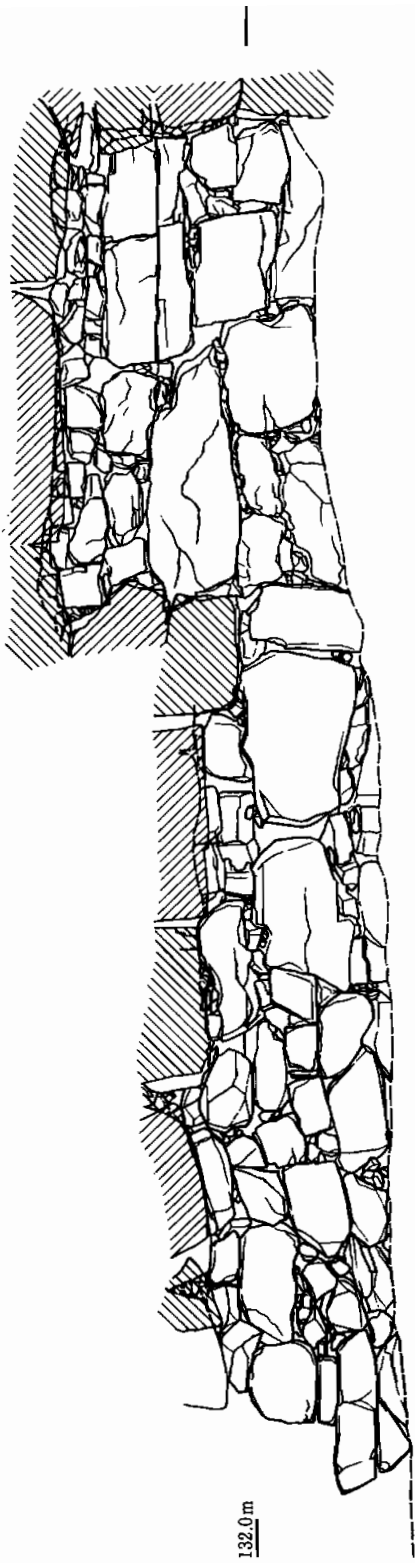
玄室右側壁 右側壁は、左側壁同様に、玄門立柱の高さにおいてほぼ下部の石が横に並ぶため、楣石架構の前段階での1つの作業単位であると考えられる。

この単位までにおいては、基本的には大型の石材を使用しているが、玄門付近では隣石との高さを調節するためか、中型の3石を使用している。この単位より上においては、特に大型の2石を横位に積んでいる。玄門側の方の上には小型の石を3石積み、奥壁側の石との調整を図っている。その上に人頭大や小型の石を使用し天井石との高さを調整している。石の積み方を断面図で見ると、右側壁と左側壁ともに下から2石目より持ち送り状に迫り出して積まれていることが分かる。また、奥壁側3段目の石と天井石との間の人頭大の1石は、隅詰め技法の積み方のように、側壁と奥壁の両方にまたがっている。上部の石材には亀裂や割れた石が見られるが、これは天井石の重量や、石室の上部に水分が多いこと、花崗岩という石材に起因するものと思われる。(長本幹)

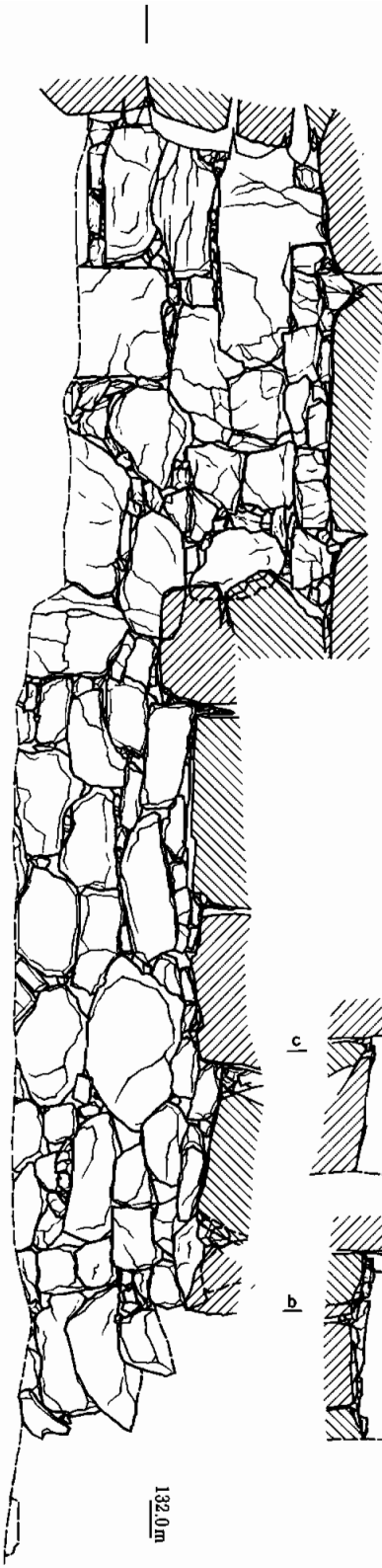
奥壁 現状の基底部は、大型の2石と隙間を補う石とで構成される。右側壁側の石材は、現状の高さ約0.80m、幅1.40m測る。現状では土の堆積が特に右側壁付近で激しいため断言できないが、直線的な上端部や、ほぼ垂直に降りる横端部から、長方形に近い石面をしているものと思われる。このことから安定した壁面構成への寄与という基底石の役割を感じることができる。左側壁側の石材は、現状の高さ約0.70m、幅0.90mである。右側壁側に比べ不整形であり、隙間を小型の石で埋めている。

2段目も基底部と同じく、大型の2石と隙間を補う石とで構成される。右側壁側の石材は、高さ約0.80m、幅0.90mを測る。ほぼ水平な底面と上面を呈する台形で、特に底辺においてはほぼ直線的な面をもち、右側壁側の基底石との隙間はあまりない。扁平な小型の1石を挟んでいるのみで、安定した接合面を呈している。それに対し、上面はわずかに傾斜するため、それによって生じた空間に石材の充填を行っている。左側壁側のものは高さ約0.70m、幅1.20mを測る。所々に突起がみられ、不整形な石面を呈しているが、大型の石材であることもあり全体的には安定している。

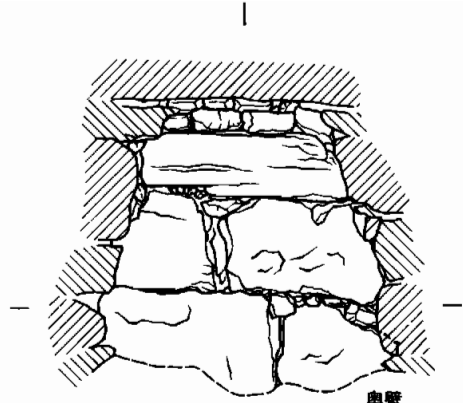
3段目は、大型の石材を1石を横位に積んでいる。高さ約0.50m、幅1.60mである。底面



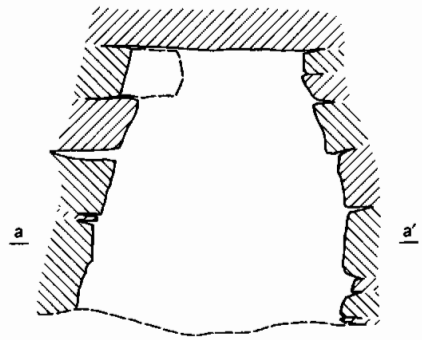
第2図 見長大歳神社古墳石室実測図



132.0m

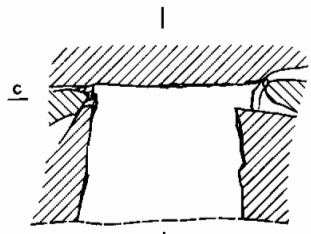


奥壁

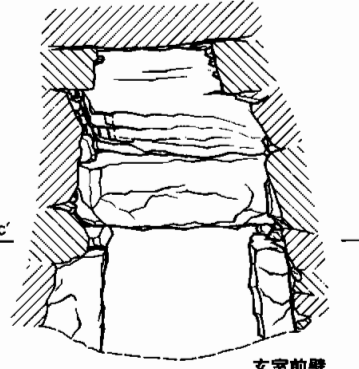


a

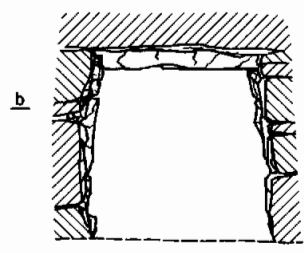
a'



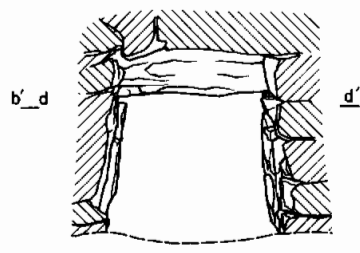
c



玄室前壁



b



b' d

d'



0

4 m

にテラス状の段差があり、右側壁側が1段高くなっている。3段目と天井石の間には、拳大よりやや大きめから人頭大の石を使用している。

これから分かるように、基底部と2段目、3段目以上では積み方に相違がみられる。前者の場合、基底部と2段目の横長の石材がそれぞれ2段目の2石と、基底部の2石と力学関係を持つ積み方をしている。つまり、縦位の目地を通さない、「品」字形に積んでいるということである。これに対し、後者にはこれらの配慮がみられない。また壁面は全体としては、内側に傾斜している。(柏木大延)

第3章 調査成果のまとめ

1. 見長大歳神社古墳の石材利用の方法

本古墳の内部主体は前述のごとく横穴式石室である。利用されている石材の選定、積み方は丁寧とは言えない。しかし、そのような中においても、どの箇所にもどのような石が使用されているのかといった問題は重要であり、その傾向を求めたのが小稿の試みである。ここでは、石室の構成要素である石材を2通りの観点からそれぞれ分類し、検討する。

(1) 石材表面積の分類による石材構成

石室の壁面をなす石材の表面積を図面上で算出し、A～E類の5類に分類した。A類からE類に行くに従い、その面積が大きくなる。各類の面積の区分は、統計的に集中する箇所を重視して設定し、面積の算出に関しては、各石材の外端において計測した。表1は、その基本データである。以下、これらの分類を使用場所について整理してみた(第3図)。

表1 使用石材の平面積と平面率

		玄 室				羨 道			全 壁	両左壁	両右壁
		奥 壁	左 壁	右 壁	小 計	左 壁	右 壁	小 計			
平 面 積	A	3%	4%	5%	4%	3%	5%	4%	4%	3%	5%
	B	5%	13%	11%	11%	16%	11%	13%	12%	15%	11%
	C	—	13%	18%	13%	23%	24%	23%	19%	18%	22%
	D	64%	37%	24%	37%	37%	27%	33%	34%	38%	26%
	E	23%	13%	30%	22%	9%	18%	14%	18%	11%	23%
	計	95%	82%	88%	87%	88%	85%	87%	87%	85%	87%
平 面 率	~100%	60%	26%	42%	38%	7%	35%	21%	30%	16%	38%
	~90%	17%	32%	27%	27%	58%	22%	41%	33%	46%	24%
	~80%	2%	10%	12%	11%	5%	8%	6%	8%	7%	10%
	~70%	15%	3%	1%	4%	11%	7%	9%	7%	7%	5%
	~60%	1%	11%	6%	7%	7%	13%	10%	9%	9%	10%
	計	95%	82%	88%	87%	88%	85%	87%	87%	85%	87%

A類 (～225cm²)

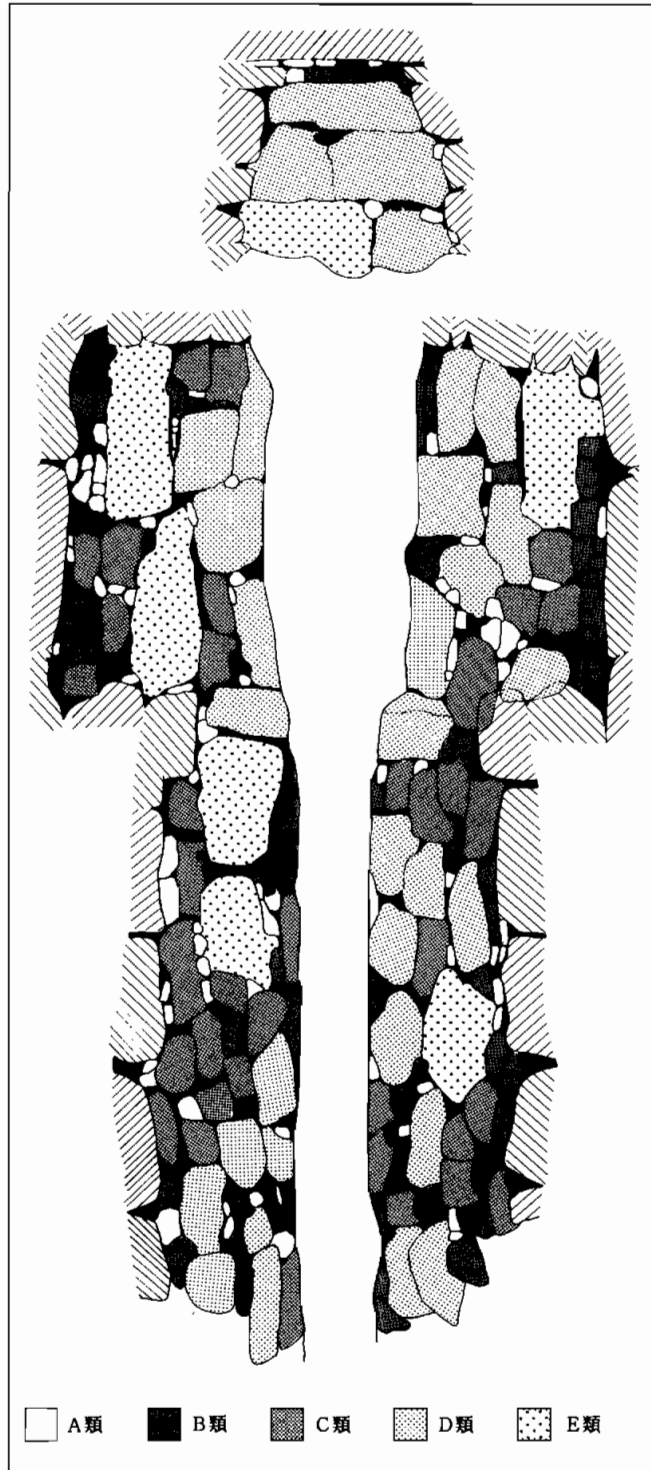
奥壁での利用は、玄室左側壁部の基底石と、2段目の隙間を埋める詰め石があり、天井石架構の高さ調整のためのものである。左側壁においては、天井石との高さの調整に使用したものはわずかであり、他は詰め石としての利用である。右側壁でも、ほぼ同様である。しかし、玄室においては、天井石との高さ調整において多用されている点で異なる。また、この大きさの石材を2石、3石と積んでいるのが目立つのも玄室右側壁のみである。詰め石としての利用が主であろう。

B類 (226～900cm²)

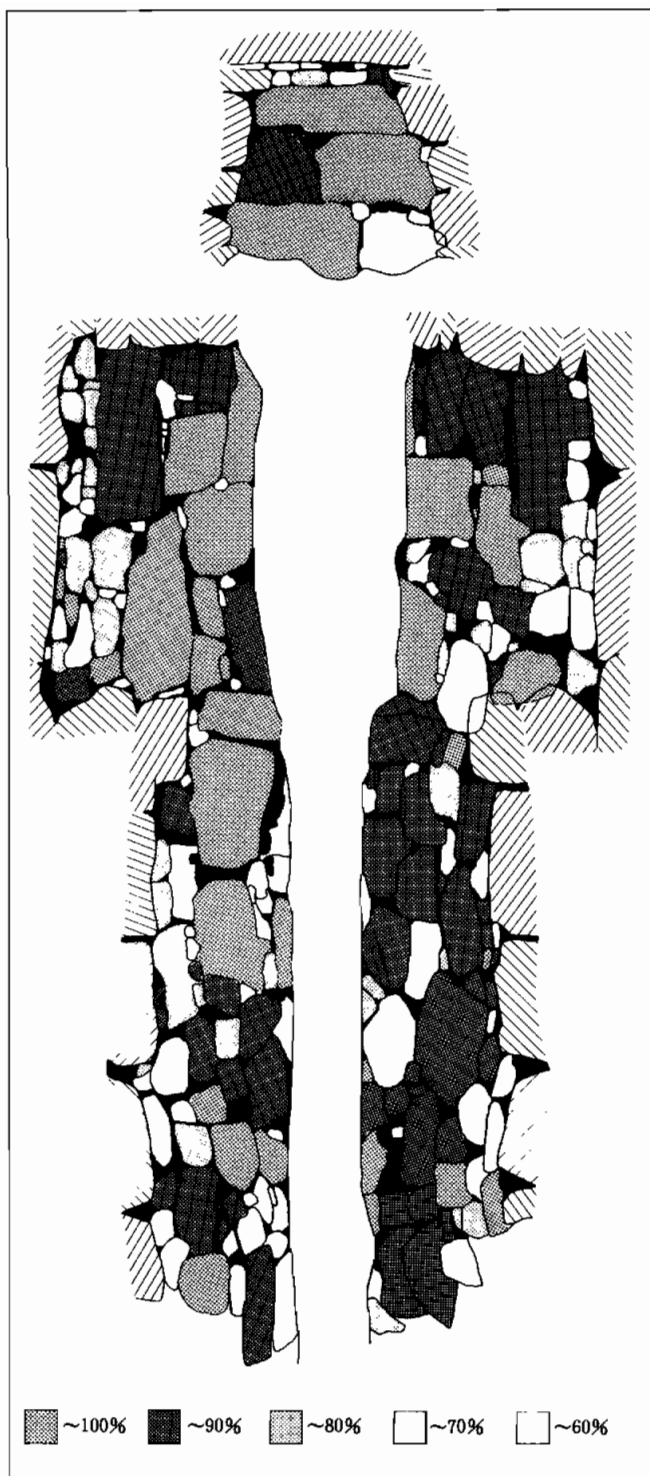
奥壁においては、天井部との調整の3石のみである。また、玄室側壁においても天井石との高さ調整において最も多く使用されている。羨道部においては、その使用の傾向は見られない。

C類 (901～2500cm²)

玄室側壁においては、中位部での使用が多い。また、玄門側でも同様に多く使用されている。羨道部左側壁の玄門部付近は、この大き



第3図 石材の表面積の分類



第4図 石材の平面率の分類

さの石材を4石積んでいる。これに対して、右側壁では、大型の1石で構成している。羨道部においては、中間付近で多く見られる。

D類 (2501~6400cm²)

奥壁においては、1~3段目において使用されており、奥壁全体の64%の面積を占める。玄室側壁においては、大半が下部の方で見られるのに対し、羨道部においては特にこの傾向は見られない。開口部より2枚目の天井石までの側壁において多く使用されている。全体的にこの大きさの石材の使用は多く、全体の約34%を占める。

E類 (6401cm²~)

奥壁においては基底石として1石使用されている。しかし、他の各壁には基底石としての使用例はない。玄室側壁では、左側壁において1石存在し、右側壁においては、ほぼ並んで横位にして2石存在する。羨道部においては、左側壁側のほぼ中央部において1石、右側壁側は、玄門部付近において横位に並んで2石使用されている。

(2)石材の平面率の分類

各石材は、それぞれ石室面を構成する面積比を違えている。ここでは、壁面の構成率を整理して、石材の利用方法に考えたい。ここで述べる平面率とは、石室の壁面を構成する個々の石の壁面積を、その石材の図面上の総面積で割った値を機械的に求めて割合を出した。従って、パーセントが大きいほど、壁面積を多く占有している（第4図）。

60%未満 玄室では天井石との高さ調整の石として使用しており、また詰め石としての使用もある。羨道部は左側壁はわずかに散在するのに対し、右側壁側は主に開口部付近の下部と上部に存在する。

60%～70%未満 奥壁の左側壁側の基底石があたる。玄室内においてはこの範疇に入るものは少なく、基底石においては唯一である。羨道においては、左側壁中央においてC類とD類の石を多用しており、これらが該当する。

70%～80%未満 玄室においては、左側壁で1段目の詰め石として使用している他には、主に天井石との高さ調整の石材として使用している。玄室における高さ調節の石材は、これらと60%未満のものが大半を占めている。

80%～90%未満 奥壁では2段目の右側壁側に用いている。また、両側壁とも奥壁に接する石材のほとんどがこの範疇にある。羨道部においては、左側壁でこの平面率の石材が突出して多くあり、羨道部左側壁全体の面積の58%を占めるほど多用されている。

90%～100%未満 奥壁においては、1段目から3段目の各石材がこの範疇に入る。奥壁面積に占める3石の割合は60%である。玄室両側壁では、下部に多く見られ、1段目の6石のうちの5石がこの範疇に入る。C類とD類の石材が多く、左側壁が全体の50%となり、右側壁が全体の42%を占める。羨道部では、左側壁に比べ右側壁での利用が多く、左側壁の占める面積が7%であるのに対して、右側壁はD類とE類の石材を中心に35%を占めている。

(3)小結

以上の分類・整理から、玄室・羨道部ともに、左右の側壁によって大きく石材構成に差があることがわかった。特に、E類の石材の使用比率は顕著である。玄室部では左側壁の面積比が13%であるのに対し右側壁が30%、羨道部では左側壁が9%であるのに対し右側壁が18%となり、その使用頻度が2倍以上である。平面率においても同様で、特に羨道部において左側壁で90%～100%までの石材の面積比が7%であるのに対し、右側壁では35%である。しかし、D類の面積比を比べてみると、玄室部では左側壁が37%、右側壁が24%、羨道部では左側壁が37%、右側壁が27%であり、E類の石材の面積比と逆になっている。平面率についても同様のことがいえる。

従って各石材は、玄室と羨道にかかわらず、左側壁と右側壁は同じ傾向の石材構成であることがわかる。E類とD類、および80%～90%の石材と90%～100%の石材の利用（面積比）

に差はあるものの、その和はほぼ等しく、安定した石材利用であることがわかる。なお、壁面をなさない石材や、室間（第4図では黒塗り部分）の比率は、奥壁では5%であり、全体では13%である。

最後に、当古墳の石材構成で言えることは、必ずしも大型の石材を基底部に使用しているとは限らないことである。奥壁を例外として、むしろE類の石材は中段以上に積む傾向がある。この理由としては、E類を上部に使用することで、下部の石材をその重量によって安定させることのほか、天井石の重量をバランスよく下部に伝え、固定させたことが推測可能である。このことは、上部においてE類の石材を使用していない箇所、たとえば玄室左側壁の玄門側、また中段にE類の石材を使用する玄室右側壁の玄門側において、後世と見られる孕み出しが生じていることからとも言えると思われる。（柏木大延）

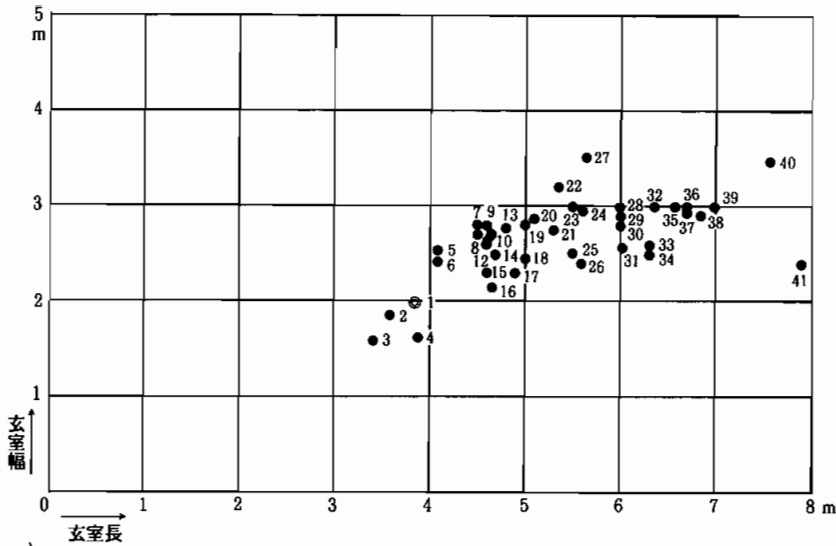
2. 石室の年代について

石室の構造は、概ね長方形プランの畿内的な石室であると言えるが、開口部より3枚目の天井石に段を持ち、2枚目から開口部に向かって緩やかに傾斜すること、楣石が羨道部の天井の高さより1段下がる点、玄門立柱石を設置するなど畿内的とはいえない面もある。前二者に関しては、京都府向日市物集女車塚古墳や島根県出雲市大念寺山古墳で見られるものの、後者を加えた3要素を兼ね備えた石室に関してはあまり類例をみないものと思われる。

見長大歳神社古墳の築造時期は、前述のごとく発掘調査等も行われておらず、また遺物も伝わっていない。また、氷上郡内における石室調査例もさほど多くなく、石室構造のみによって築造時期を推定するには危険が大きい。しかし、前述のごとく、当墳は畿内型の石室の範疇に属すると思われるので、大和の古墳の例あげ、大まかな築造時期を考えてみたい。

当墳の石室は、玄室長と幅の比率は1.91である。この比に近似する大和の石室は、平林古墳、水泥塚穴古墳、都塚古墳、秋殿古墳などである（第5図）。石室の年代は、研究者によって差があるが、ほぼ6世紀後葉から7世紀前半の時期とされる。これらの石室は、7世紀には前壁が1段になるため、2段で構成される当古墳の時期については、6世紀末がその下限となる。石材からみても、大型石材の使用はあるものの、いわゆる「巨石墳」と呼ばれるほどの石材の使用もなく、また石の表面も敲打等で調整された跡もなく、この古墳をこれ以上新しく考える要素はないと考える。

このことを念頭に置きながら次は、氷上郡の石室を概観していくことにする。6世紀前葉には、春日町多利向山C-2号墳が築造され、それにやや先行するかもしくは同時期に井原至山古墳が出現する。この2つはいずれも平面形が方形プランに近い。この後、数十年ほどのプランクの後、坂1号墳と2号墳が出現する。いずれも6世紀後半代と推定され、1号墳は、左袖がやや退化している。この両古墳は、奥壁と側壁との隅を充填する形で石材を架構

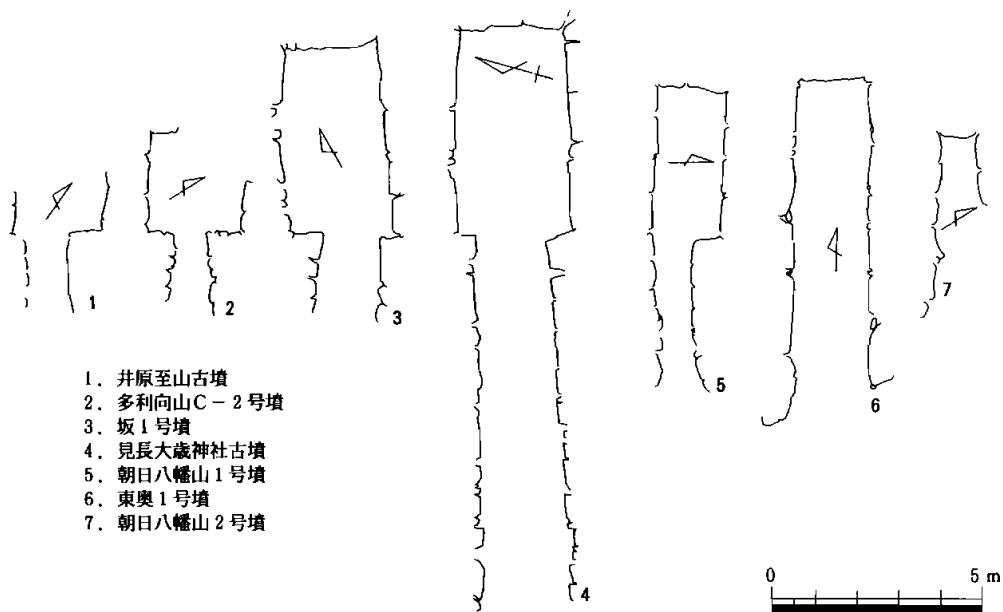


- | | | | | |
|-------------|---------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 見長大歳神社古墳 | 2. 珠城山1号墳 | 3. 西宮古墳 | 4. 二塚古墳(前方部) | 5. 宮山塚古墳 |
| 6. ツボリ山古墳 | 7. 舂墓古墳 | 8. 岩屋山古墳 | 9. 水泥南古墳 | 10. 秋殿古墳 |
| 11. 峯塚古墳 | 12. 勢野茶臼塚古墳 | 13. 越塚古墳 | 14. 文殊院東古墳 | 15. ムネサカ1号墳 |
| 16. 珠城山3号墳 | 17. 三里古墳 | 18. 打上古墳 | 19. 小谷古墳 | 20. 文殊院西古墳 |
| 21. 都塚古墳 | 22. 柿塚古墳 | 23. 平林古墳 | 24. 水泥古墳 | 25. 櫛現堂古墳 |
| 26. 笛吹神社古墳 | 27. 乾城古墳 | 28. 石上大塚古墳 | 29. 烏土塚古墳 | 30. 谷首古墳 |
| 31. 茅原狐塚古墳 | 32. 赤坂天王山古墳 | 33. 藤ノ木古墳 | 34. 新宮山古墳 | 35. 割塚古墳 |
| 36. 牧野古墳 | 37. 二塚古墳(後円部) | 38. ウワナリ塚古墳 | 39. 塚穴山古墳 | 40. 石舞台古墳 |

第5図 大和の主要横式石室の規模

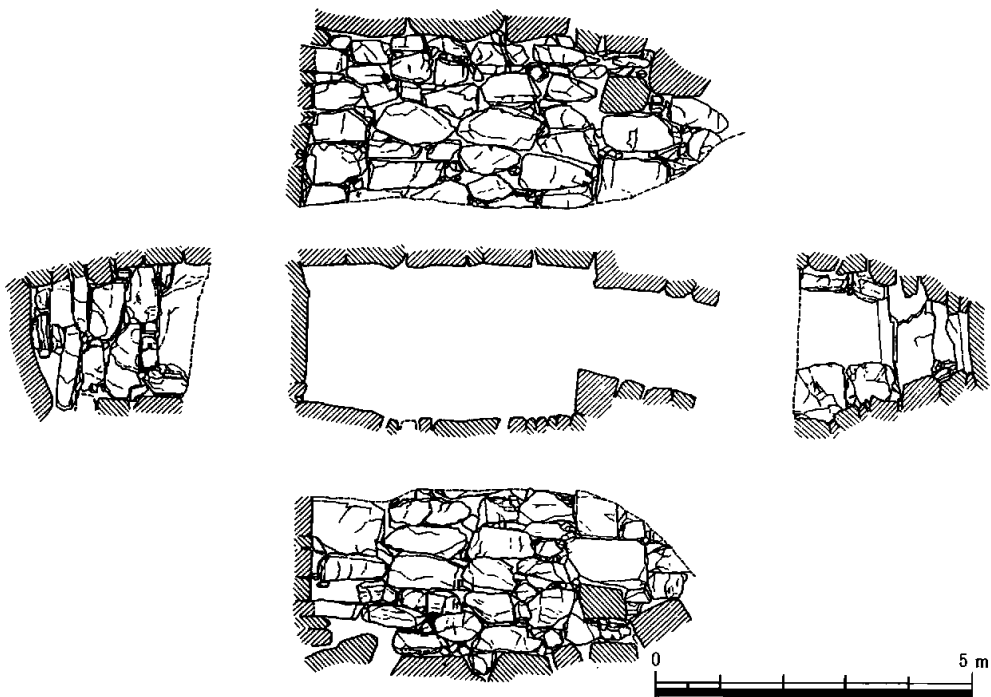
するいわゆる「隅詰め」を呈する古墳で注目される。6世紀末葉には、右袖が退化している平松片山古墳がある。片袖式ものとしては6世紀末葉の朝日八幡山1号墳であり、7世紀にはいと無袖式の東奥1号墳と朝日八幡山2号墳がそれぞれ築造される。この流れの中で見長大歳神社古墳の石室の位置づけをするならば、坂1号墳と見長大歳神社古墳の前後関係において見長大歳神社古墳の方が大型の石材を使用していることから後出とする推測が成り立つ。平松片山古墳との関係については、この古墳が削平を受けており、石室の遺存状態が悪いことから不明といわざるをえない。6世紀末葉には、片袖の石室が主流になることから判断して、大筋では坂1号墳よりは後出であり、朝日八幡山1号墳と同時期かやや前出であると考えることができる。朝日八幡山1号墳からは、TK43型式に近い須恵器が出土しており、この点を加味すると、概ね6世紀の第4四半期に近い年代が与えられよう。

しかし、これはこの石室の変遷が同系譜であると言う前提の話である。坂1号墳と朝日八幡山1号墳は、技術的に同系統であるが、見長大歳神社古墳との石室構造を比較した場合、「三角隅詰め」の有無の他、楣石と天井石の加構状況が異なる。すなわち坂1号墳が0石と天井石が遊離して架構されているのに対し、見長大歳神社古墳は接している。さらに、見長後者には明確な玄門立柱石が存在するという違いがある。これらのことから、氷上郡内の小地域において、各々違う石室形態・技術者集団が存在していたと考えられるが、ほぼ朝日



1. 井原至山古墳
2. 多利向山C-2号墳
3. 坂1号墳
4. 見長大蔵神社古墳
5. 朝日八幡山1号墳
6. 東奥1号墳
7. 朝日八幡山2号墳

第6図 水上郡の横穴式石室の平面図（村山美生『平松片山古墳』水上郡教育委員会 1995年より。一部改変）



第7図 坂1号墳の石室実測図（植野浩三編『水上郡埋蔵文化財分布調査報告書』2 1995年より）

八幡山1号墳頃を境にして、1・2の例は残るが、「三角隅詰め」の技術は次第に退化していったことは明確である。それは、朝日八幡山1号墳に隣接する同2号墳においては、その技術は用いられなくなっており、同様のことが坂古墳群内の他の古墳や、水上町北野古墳群・小野山古墳群内でも認められる。こうした特殊な技術の退化と平行して、平面形の退化や大型石材の使用が一般的に見られるようになっていくと考えられ、見長大歳神社古墳の築造年代も矛盾してこないと判断したい。(吉田和彦)

おわりに

今回調査した見長大歳神社古墳は、兵庫県内でも良好に遺存する石室をもつ古墳であった。調査は、その記録と資料の公開を目的として、奈良大学文学部考古学実習の一環として取り組んだ。調査概要は、それぞれ参加学生が分担執筆して、報告することが出来た。

石室は、未調査のため現在でも床面に土砂が堆積しており、必ずしも最良の状態の調査とはいえないが、石室規模の確定や、石材の構築状況を正確に記録し、公表できることは貴重な成果であろう。石室の使用石材のまとめでは、一般的に基底部に大型石材を据え、上部に行くに従い中・小型石材とする考え方があるが、それには逆行しないまでも、中型の分類に属するC類が、意外と側壁の中位段階に多用される傾向が指摘できた。また、石室の表面を構成する石材の表面積の割合は、前記と比例して、中型以上の石材になればなるほど、壁面を構成する面積比率が大きく、石材の使用方法にも大きな法則があったと考えられる。これは、当然のことながら、壁面を形造る上で、石材は表面の平滑なものが望ましく、その多くを特に中・大型石材に求めていた。実に基本的、かつ整合的な結果ともいえるが、各石材の認識を改めて行う必要があろう。

さらに、中型石材の中・上位部での使用は、壁面形成の意匠もさることながら、下位石材の安定と固定を大きな目的にしている。今回の調査では、基底石との関係は追求できなかったが、こうした大・中・小の石材が有機的に関係して、壁面全体を形成し、構成していたと判断できよう。特にこれが、玄室部から、羨道奥部において多く見られる点は、石室構造の上からも重要であり、力学的な配慮と施工の結果と判断できそうである。この点からしても、小型石材は非常に不安定な存在であり、補足的意味合いが大きいと判断した。簡略ではあるが、以上をまとめて添えることが出来た。

石室の構築時期については、正確な根拠に乏しい。一応前章の成果から、6世紀の第4四半期に近い年代を考えておく。当地域は、調査例が少ないものの、石室形態の多様性において、非常に重要な地域である。6世紀の前半代に、正方形に近い形態から始まり、やや長方形に近づくが、「隅詰め」の技術を駆使した石室も存在する中で、通有の片袖・無袖へと、

さらに大型石材の使用へと移行するが、一様ではない。「隅詰め」技術の解釈には、日本海側の古墳との関係を強調するものや、近畿の渡来系石室との関係で考えるものなど、定まっていない。本書でそうした結論を導くことは無理であるが、既に公表している坂古墳群の資料や、周辺の成果を加味して論じて行ければ幸いである。そうした中で、当古墳の調査成果も、今後、この地域の標識的なタイプとして提示し、参考資料になることを祈念したい。

最後に、今回の調査では多くの方々の協力を得た。とりわけ、氷上郡教育委員会には、調査の計画から実施、さらには本書の作成に至るまで、多大な協力と援助、教示をいただいた。また、石室調査の方法とその解釈では、在学生をはじめ多くの卒業生や関係者の方々から教示をいただきました。文末をお借りしまして感謝申し上げます。(植野浩三)

<参考文献>

- 喜谷美宣・眞野修『柏原町東奥第1号墳・挙田古墳発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会 1973年。
丹波史談会『丹波氷上郡志』上巻 臨川書店 1927年。
植野浩三編『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書』3 - 兵庫県氷上郡柏原町 - 氷上郡教育委員会 1996年。
文化庁文化財保護部『全国遺跡地図』28 兵庫県 (財)国土地理協会 1982年。



見長大歳神社古墳石室測量調査参加者